

40
35
30
25
20

卷
1077
上

繪本密鑑卷第六回續

瓦六 達磨辯玉

なまくらをとる

一指をナ

うしのひぬ

一花をナ

うけのひるま

一葦をナ

ういのひるま

面壁をナ

うきのひるま

德山入門棒

とくさんじゆんぱう

鳥印棒

うしきんぱう

瓦六

瓦六

瓦六

瓦六

瓦六

瓦六

瓦六

武帝達磨

せきりだつま

隻履をナ

せきりのひるま

浄衣をナ

じよいのひるま

板齒をナ

ばんしのひるま

結界大蘿蔔

けいがくだいらぼ

深内二口座

しんうちのにちやくざ

連山赤跨棒

れんざんせきくわんぱう

百辛

南泉一虎回答

百辛一

文殊無着回答

百辛十二

偽山仰山揚菴回答

百辛十三

藥山枯者

百辛十四

鶯子梵菴

百辛十五

訥僧滅燭

百辛十六

首山竹菴

百辛十七

曹山圓寂

百辛十八

盤山松闇大恵

百辛十九

有泉菴梨

百辛二十

南泉一多和

百辛二十一

迦葉作舞

百辛二十二

仰山半月祐

百辛二十三

作山劃一劃

百辛二十四

作山劃一劃

百辛二十五

資福一圓相

百辛二十六

南浦君雲

百辛二十七

歷石生経慶回答

百辛二十八

黃檗庵庵

百辛二十九

祐吉和尚

百辛三十

百丈野航

百辛三十一

萬榮榮大俊活

百辛三十二

泊山移木樞

百辛三十三

布袋

百辛三十四

阿闍世王

百辛三十五

悟達國師

書于安由子越之繪本窟鑑之後
目錄之端

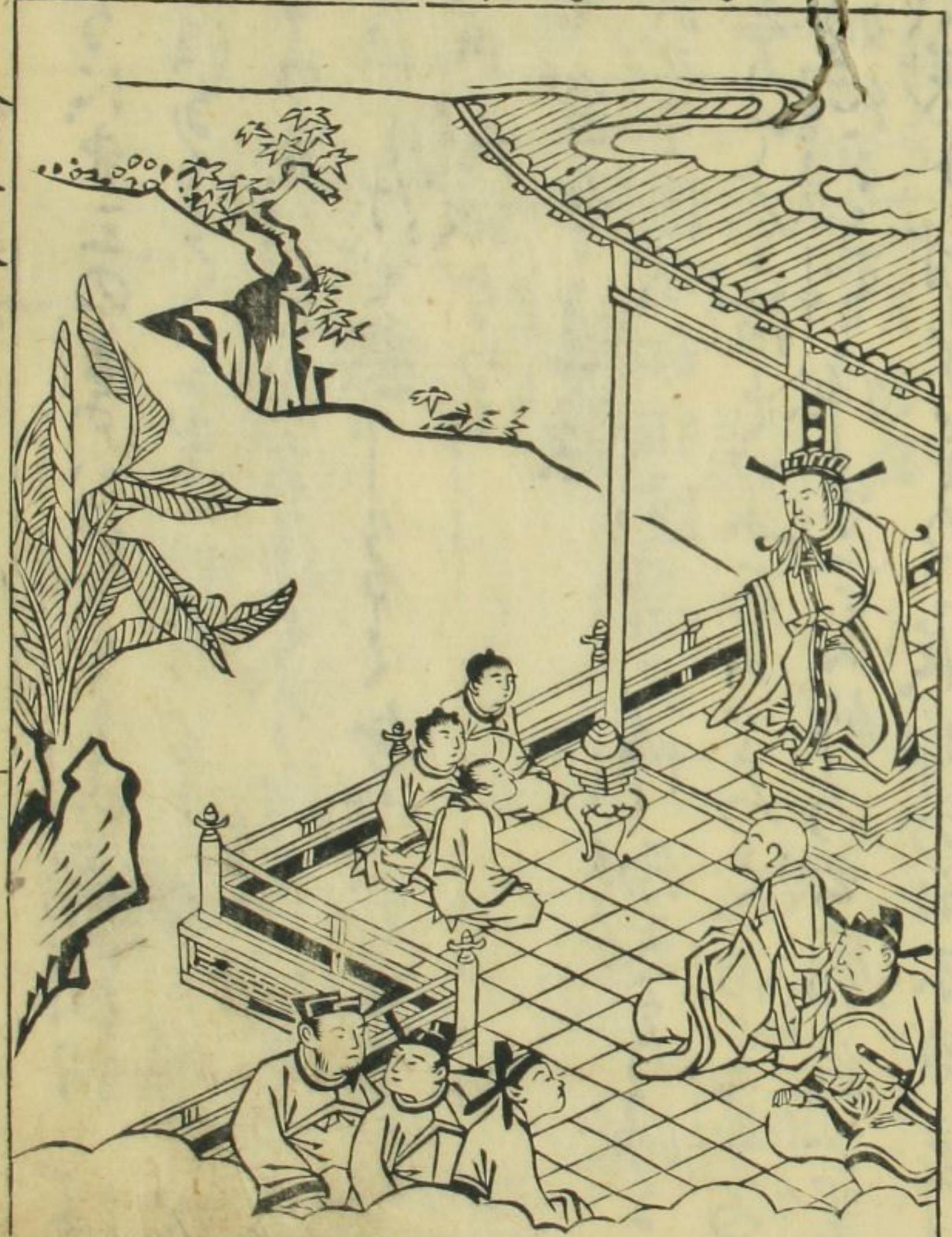
龍跳取明水、湔瑕、塞鑑清

傳神千歲後、光耀昭群生

岫雲軒主林元叟題



百六十達磨、辨玉
達磨ハ
香反王
ノ才ニ
れ也。也。
あれども
ス王弟
有のむ
とひき
とがた
にえを

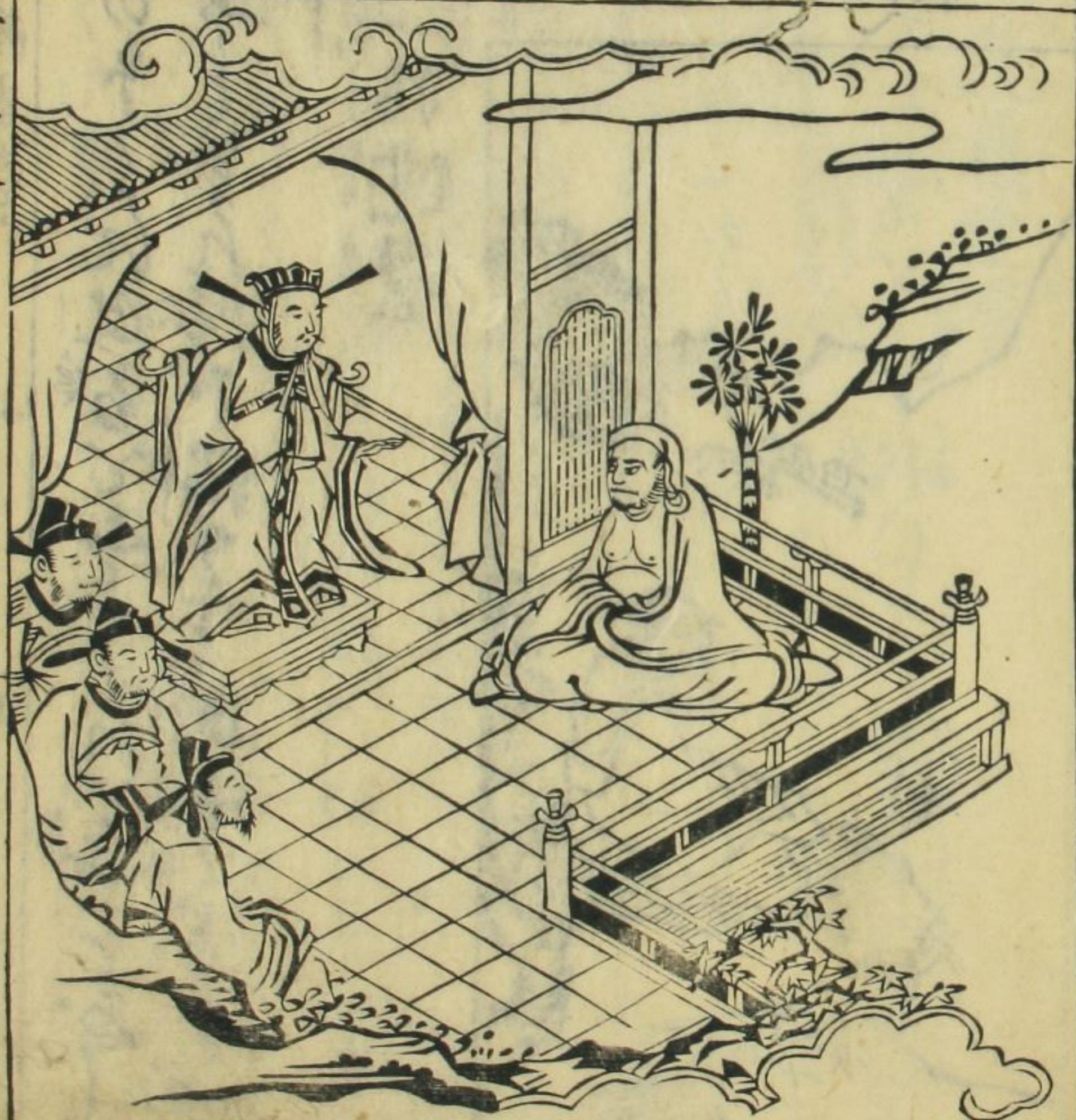


らきりうに才この玉すハびむまよの寶にわいば
かハ絶はあくぐハ富とわのひどと。何れかうと
すり。そのをに役者あ附モハ近臣ひりくに
しがちはとばと感。ドクタリとあり。能あらん
た玉乃れ。う依ケラフ。

石力主 武帝を度

深秀武帝固ふ初祖達磨大師而天より海よ
後び事つて金陵と云ふ不よづら。帝より是る
帝曰如何乞聖緋。才一義作の云廓然垂
帝れ云朕少財。どうらうの少財。帝の云不減。帝
契りび源起よ蘆と折くにと渡く魏よ聖。

はふ帝
奉書・誌
ム小の御
の云陛下
をくげ
人と鐵や
帝の云
らば、德の
え。これ乞
鉢を全
竹と



物の事のまことに性あるとあくさんと云ふとる。徳の云つてとあられ陛下承さんと圓ゆ人をも地

亦四

石卒ハ一拾達磨

さテの縁

直指

人心
見
成佛



百丈 隻履達磨
伊祖を摩涅槃とす。餘りクバ。鷲年山の足後
リ不不。善とす。は二年り小魏王の役有宋雲
とつもの西域小ゆゑと遙。葱嶺とす。ところ
多く。またのり小履と隻とづくと西小ゆゑ
あり。またの云。めが世人已代と脚。我ハ西
ゆゑ。ゆゑと。写真。かふとも。かぬとれや。も。ゆ
事れど。帝果て崩。じゆひね。は魏の孝莊帝
小奏す。と。帝云。それつら。またのれ。墓と多きて
凡。多。で。戸。數。つ。あ。く。と。履。復。り。延。ス
物と奉。く。げ。隻。履。と。か。く。ケ。株。ア。修。と。と。圓。え

三年花叢

ちのゆア
ドウト
竊あれう。

所在と

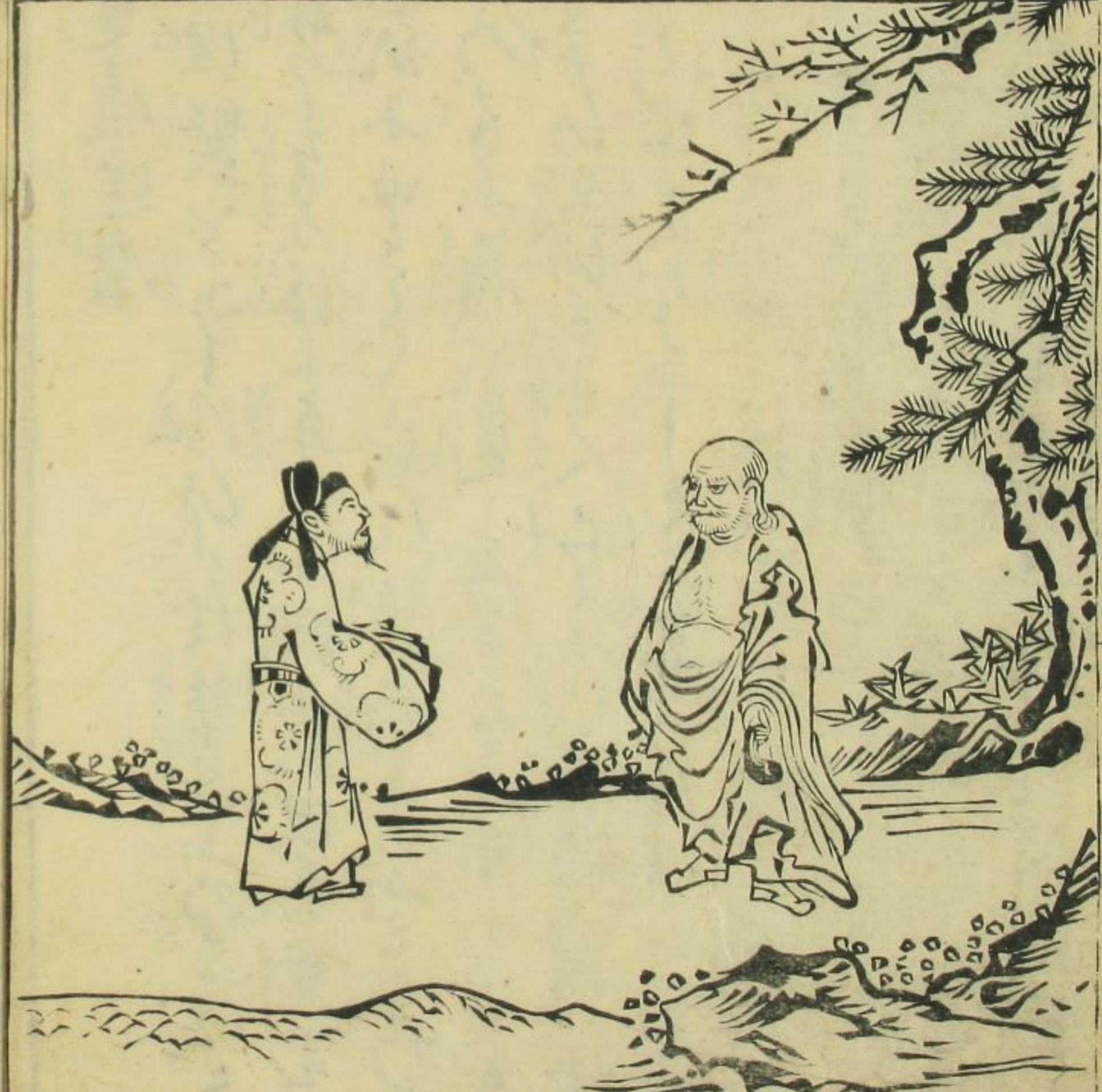
生ひ

トモヤ

瓦室一 華達磨

一花門

一華達磨



百卒ニ 一葦達磨

廓然無聖

逆龍鱗一葦

横江

百卒ニ 枝歯達磨

希叟達磨忌拈香
不紹金輪尊貴位
被人打落

當門齒



百卒ニ 面壁達磨
達磨浮山のケ稀も小於く。西壁也。九年。人

百卒ニ 面壁達磨
達磨浮山のケ稀も小於く。西壁也。九年。人
これと測とう。時
アリ。これと壁觀婆
羅門と。アリ。打才三
み云。アリ。栗くり魏
浮アリ。汝陽サ抹モア
西壁也。九。アリ。九
年。アリ。と。阿。ト。ア。モ。九
達磨初。ア。ニ。毛。教



來とひきと急行どは草小心印とゆく孰と被り
宗と以も所理教外別侍不立文字直指人心見
性成佛也

石六十五 狩列大蘿蔔

傍向詰列
渠聞和焉
親南泉又見
と是否列曰
鎮列少大蘿
葛頭とす
とうく

石六十六 德山入門棟

徳山の鑒證
仰初寫ふ
あく全剛
經を講じか
と段あ方
の徳家と
國く。至る
ゆ車ふ。疏



沙と載て寫とも初教潭を負ひて連山にあせらる
乃ちとちど凡俗の門に入るとよしハ役様

石う千七 深明ニト産

源のう千七 因り淮河ふづく人の網と
牽ふひ川の狸網より毛あれと見れ。明
治の云済を後からされ一小箇の網傍よし
うり。源の云あら毛かくのうとくとくと毛
初網羅のうらうりのうらうらさみはあらんと
源の云済見あらじゆとちとけりとけりとけり

方す者ととく



百二十八 乌臼棒

鳥四孫作 ふ傍向を
訓甚也。云。宣列作
の云宣列の邊に這
表と行ひ云別あ
ば。作の云。あああ
ぞんば文よ被中に
持。されと云く役
お。傍は云様見
眼わり。ああく
人とすとあうせ

作の云。今一チとおもととく又おと云下を。
傍役あら。作の云。居持えま人の寒うこと
あら。云。ねぬれものも裏おけうこといふ
さん。作の云。あら要とば。傍。い。回とん傍
をちあく。傍のもの。の。存と奪とく。傍とわと
ラ下。作の云。居持え。傍の云。人の寒うこと
あら。作の云。あく。おけの。傍とわと。傍れひ
作の云。却て。与度。小ちや。傍大翁あく。作の云
済の。與度。済の。與度
百二十九 沖山來跨棒

徳山か冬。おと。示あく。云。今。和。手。法。あ。法。あ。

者ハ三十捧。時少僧
ありあく礼とあす。
作便折。傍云某甲
佐也。而も。あるく
便折。作の云うせ
ハこれづれのちの
人を。云新羅人。作
の云いまと。舶船
跨ざり。と。三平舟
と。与ふ。と。

百平

南泉一虎同名

松山の喫徳。昨。ゆ家。あ
泉。山三人。お。徳。く。通。平
虎。う。り。け。う。ほ。ふ。面。泉
ゆ。ま。す。而。先。の。虎。ハ。何。に
ゆ。う。と。ゆ。系。の。云。徳。見。よ
と。と。裕。よ。ゆ。う。と。ゆ。家
又。南。泉。よ。四。泉。の。云。大
奥。に。ゆ。う。と

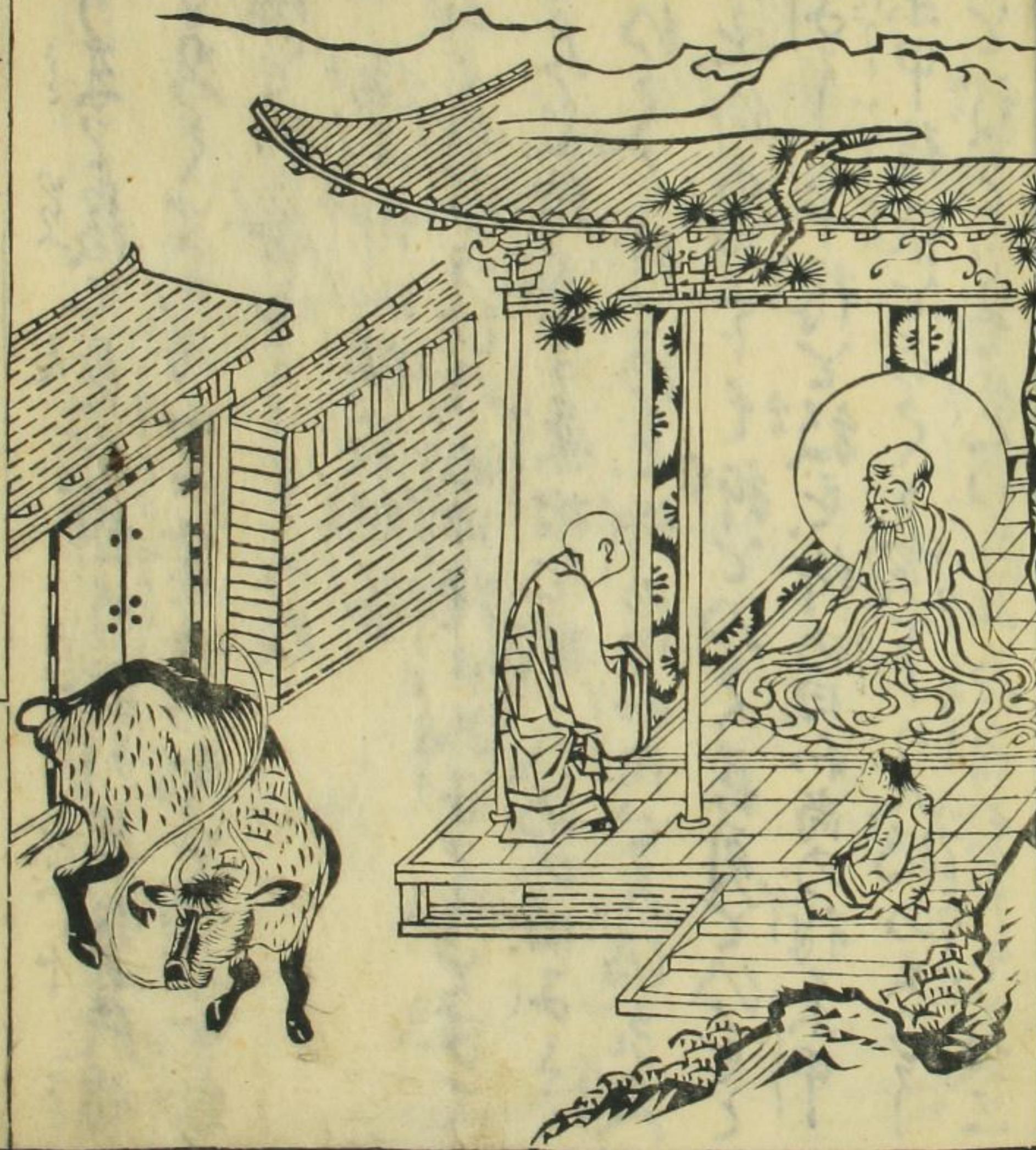


百二十一 文殊無着回答

枕君乃文殊文教總師。大慈山乃性空禪師の子。
りふくく。徳參も。至る直ふ。又至る山の祀を有る。
う徳參。金剛窟より多く礼讃も。あらう處へ一の
ぞ羅牛と事多くあり。至らと遊く寺ふ入。ぞ羅牛
す。あらう。均托と呼。童子びくと走ふ。色くも降ふ。
羅牛と紙。至るとふく童子隣れ。童子皆も禪て
全き。うひ。羅牛と。いはく。羅牛と。繡繖と持く。至る
と。うひ。羅牛と。いはく。羅牛と。繡繖と持く。至る
うひと。家の云。あるのねば。いんが。往わう。至るの冒
おほひに五戒はとまずうと。かしと。羅牛と。久
かづか。至るの日。或ハ三百。或ハ五百。至る却て
けの佛は。いんが。経持うと。羅牛の日。蛇。蛇。毘盧
九聖同居。至るの日。よりのれぞ。羅牛の日。前
後うと。羅童子と。うんで。左と右。并に。殊。確と
進し。左と右と。紹く心を。審。行。う。羅牛。波瀾
盡と。振起。あく。ゆく。日。あく。アノイ。をく。這。ケ。ア。ウ。や
い。う。や。至る。日。ア。ト。羅牛の日。み。常。多。ア。ト。ね。く。う
茶。茶と。喫。茶と。至る。到。う。う。至る。目。色。の。羅
牛。牛と。想。牛と。徳。參。至。ふ。羅牛。一宿と。投。どんと。ゆ。よ
り。う。や。い。う。や。羅牛の日。め。魏。心。つ。あ。う。う。宿。ね
う。と。ゆ。う。れ。至。る。日。基。軍。執。ゆ。う。羅牛の日。め。魏。

受戒をうやいきや。吾の曰受戒をくふし。翁の曰。汝
が熟心あらん。かんぞ受戒を用ひん。吾が辯ちと
退く。翁童子にねまひ。吾が言ふにゆる。前ま
まほらくも多め。かと。大池とづぶ。吾が御宿を。
童子曰。え。多サセ。そよ。後ゆく。曰。げ。ばづまの
事。もろそろ。童子曰。げ。ハ。金剛窟の般若ちあり。吾
が。悽絶れ。彼翁ハ。即。又。殊。う。再び。阿闍。ば
即。童子と。禪。有。う。れ。ハ。乞。一。言。別。事。と。おと。
童。偈。と。詫。く。曰。面。と。よ。真。う。化。靄。の。具。ヒ。表
う。嘆。あ。く。妙。香。と。咲。心。裏。う。嘆。う。乞。珍。賓
主。宿。主。深。乞。主。と。言。詫。く。均。挽。も。ち。も。俱。繁

受戒をうやいきや。吾の曰受戒をくふし。翁の曰。汝
が熟心あらん。かんぞ受戒を用ひん。吾が辯ちと
退く。翁童子にねまひ。吾が言ふにゆる。前ま
まほらくも多め。かと。大池とづぶ。吾が御宿を。
童子曰。え。多サセ。そよ。後ゆく。曰。げ。ばづまの
事。もろそろ。童子曰。げ。ハ。金剛窟の般若ちあり。吾
が。悽絶れ。彼翁ハ。即。又。殊。う。再び。阿闍。ば
即。童子と。禪。有。う。れ。ハ。乞。一。言。別。事。と。おと。
童。偈。と。詫。く。曰。面。と。よ。真。う。化。靄。の。具。ヒ。表
う。嘆。あ。く。妙。香。と。咲。心。裏。う。嘆。う。乞。珍。賓
主。宿。主。深。乞。主。と。言。詫。く。均。挽。も。ち。も。俱。繁



あらうりまつて後て身など。財より陰列善枕寺行
候ぬまわづく。尚山石震れ乃ちとす。至る
風く湯とみをゆりそめぬ

百七十二 僞山仰山摘茶問答

偽山仰山と至る。次ゆ曰。終日只みづかとまで。
みづかどアラビ。仰山よ茶樹と撼う。ゆの曰。みづ
ミ用とゆく。もかとゆく。仰の曰。和尚いん。ゆ久
きくを。仰の曰。もかとゆく。其角といふ。ど
ゆのえ。子アリ。平舟と放と。仰の曰。和尚の舟。系甲
喫ヒ。系甲舟返とあく。喫ヒ。ゆん。ゆのえ。子ア
リ。舟と放と。ち色の云。且た色毛アキ。みを



夏子三 柑山旅者
某山の僧。行。一日通夜。まちに。ちゆふと。山。

ありあ様れ樹の
枝へ葉へ一枝へ枝へ
とつらく作乃四
葉青色枯焉色
君の云枯焉色。作
乃云枯焉色。作
作又玄黑敷焉
義云葉焉色作
の云。酌飲うて一切
歎哉此樂無窮

去りん復ゆふ。ゆふの云枯焉後他枯
葉焉後他葉焉と作。道焉云巖と圓體焉

云ふ色焉色

百十

婆子梵庵

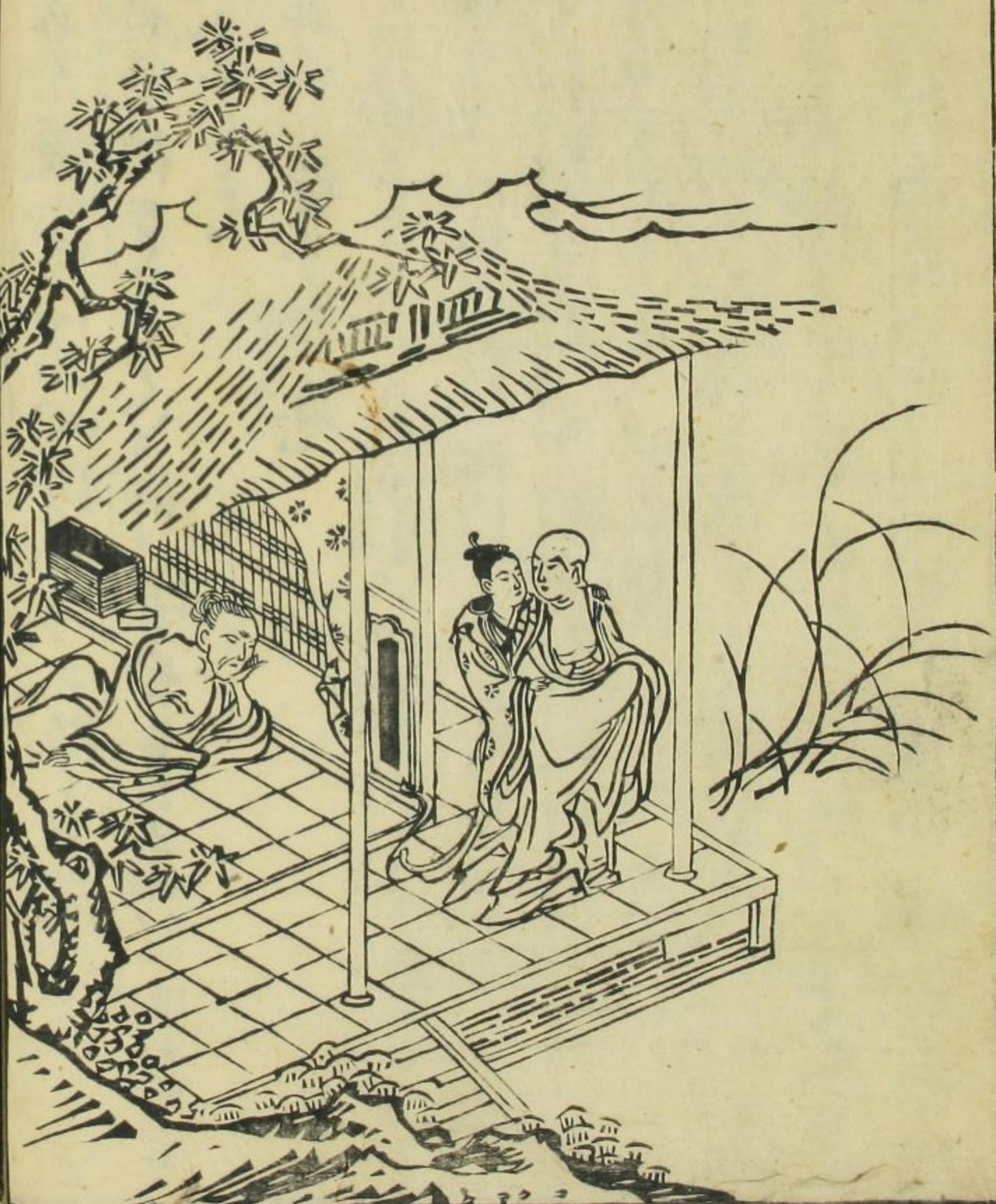
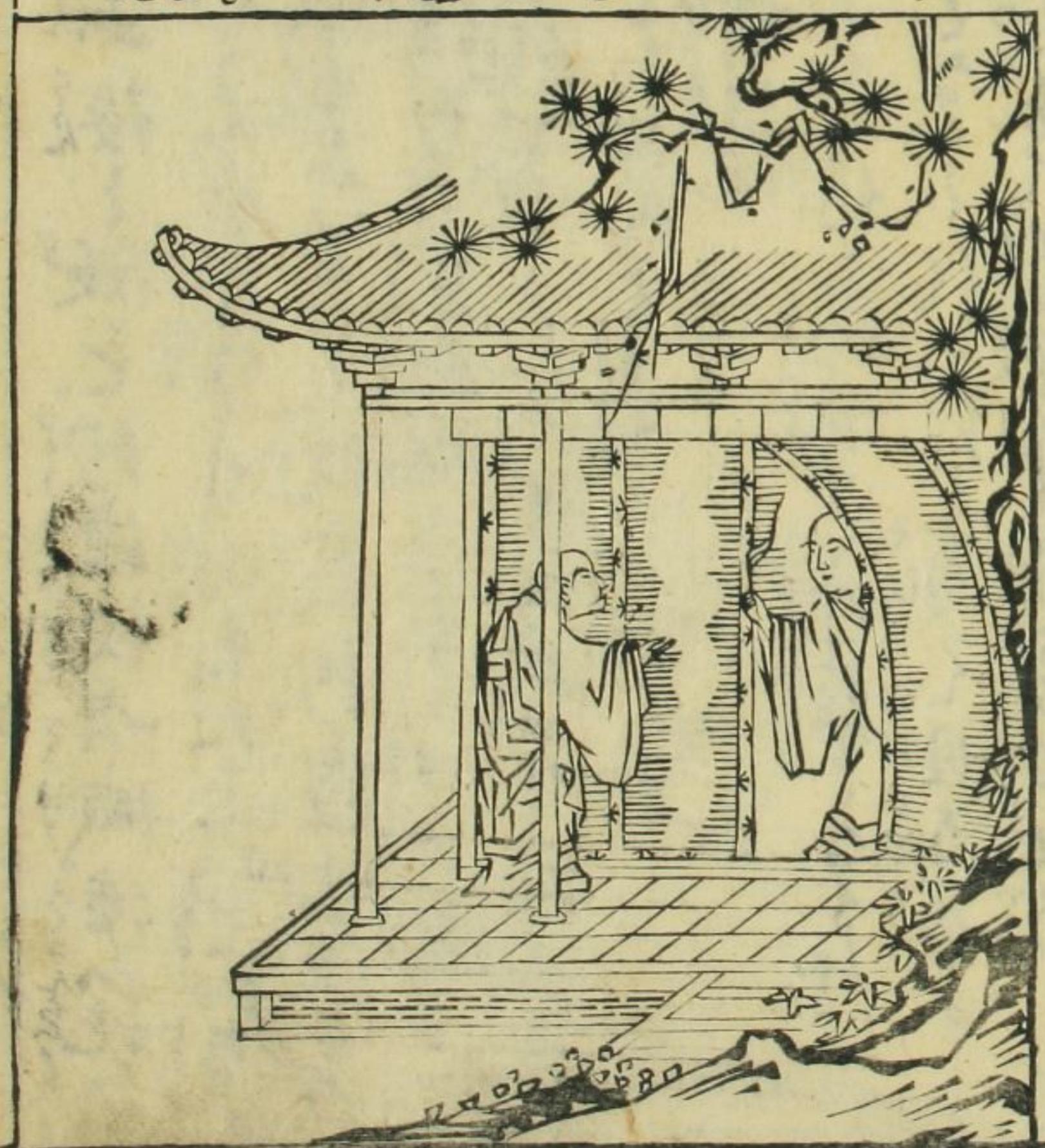
ひづけすあり。一の名焉と作焉と。二年と經く。
竹柳二八の焉され。焉のうと。うびく後と
そく結やうひ。一日婆子がの女子ふと。う焉
もうりづきつせて。正齒懸ナの時如何といひ。
焉の曰枝本を岩ふ傍三を暖ぬりと。女子海
て婆子舉ひと。婆の曰。我二年年祇ヶれ候焉と
伏事ひづり。そして。越よ遣あく焉と燒失すと也



重午

龍潭滅燭

德山園了。於潭累作移改了。
送く。而叶了。
辭しきんとす。
於潭られとあひ。
一夕もかよれて
既度と。於潭行そ飯其げ。
浦山對て曰黒。
於潭乃端と熙。



津山より。津山接と擬と。鈴澤役滅。津山礼
鈴澤の日。什ノと曰ふ。今より向去。天下を和め
むと擬。從ゆめりふくらむ。從後鈴澤役滅。而
曰。可中一ヶの漢り。牙劍樹の下に血塗よ
うり。桜おそとれと曰ふ。他所孤峯頂上不向
く吾道と立ちとせんと云ふ。

百七十六 首山竹箇跡

是山竹箇跡を指し。傍ふる所。竹箇とよまば。傳
説。喚て竹箇とよまば。此は官也。且通喚。直
ちうきんと。葉賤。八諸御界。竹箇とおぞく。禁
下。禁



百七十七

曹山圓聲

曹山ノ本寂禪作。経かくとすて乃云ひ耶。こひ耶。い
の云。和も甚度。作。作云。報心。すゑもん。

百七十八

盤山傷肉大悟

盤山毒てち
峰不移くれば
一衆人乃精肉
と罵りとづる。
居家不復く
曰精庵一行ん
と割事れ居
家刀と放下
あく又もき
云も足跡



乞精庵ある。作主下にあつまちをと



百七十九 あ無度
あ無情。僊徳師 あ多事居。時。是徳師少主と。徳
房と。日。小岐。坐徳師。圓。徳。と。ゆく。因。ばよ。往く。徳
と。うう。徳の。白坐徳師。行。圓。と。うう。と。因。佛と。徳
徳。徳の。因。びと。度。て。行。徳。徳。の。因。徳。と。徳
と。要。と。徳の。因。徳。と。度。て。徳。徳。と。徳。と。徳。
徳の。因。徳。と。徳。と。徳。と。徳。と。徳。と。徳。と。徳。
徳の。因。徳。と。徳。と。徳。と。徳。と。徳。と。徳。と。徳。
徳の。因。徳。と。徳。と。徳。と。徳。と。徳。と。徳。と。徳。
徳の。因。徳。と。徳。と。徳。と。徳。と。徳。と。徳。と。徳。
徳の。因。徳。と。徳。と。徳。と。徳。と。徳。と。徳。と。徳。
徳の。因。徳。と。徳。と。徳。と。徳。と。徳。と。徳。と。徳。

天下の人と殺をとりて死ふ翁も家に西ノ岡



西半

南泉黄翠

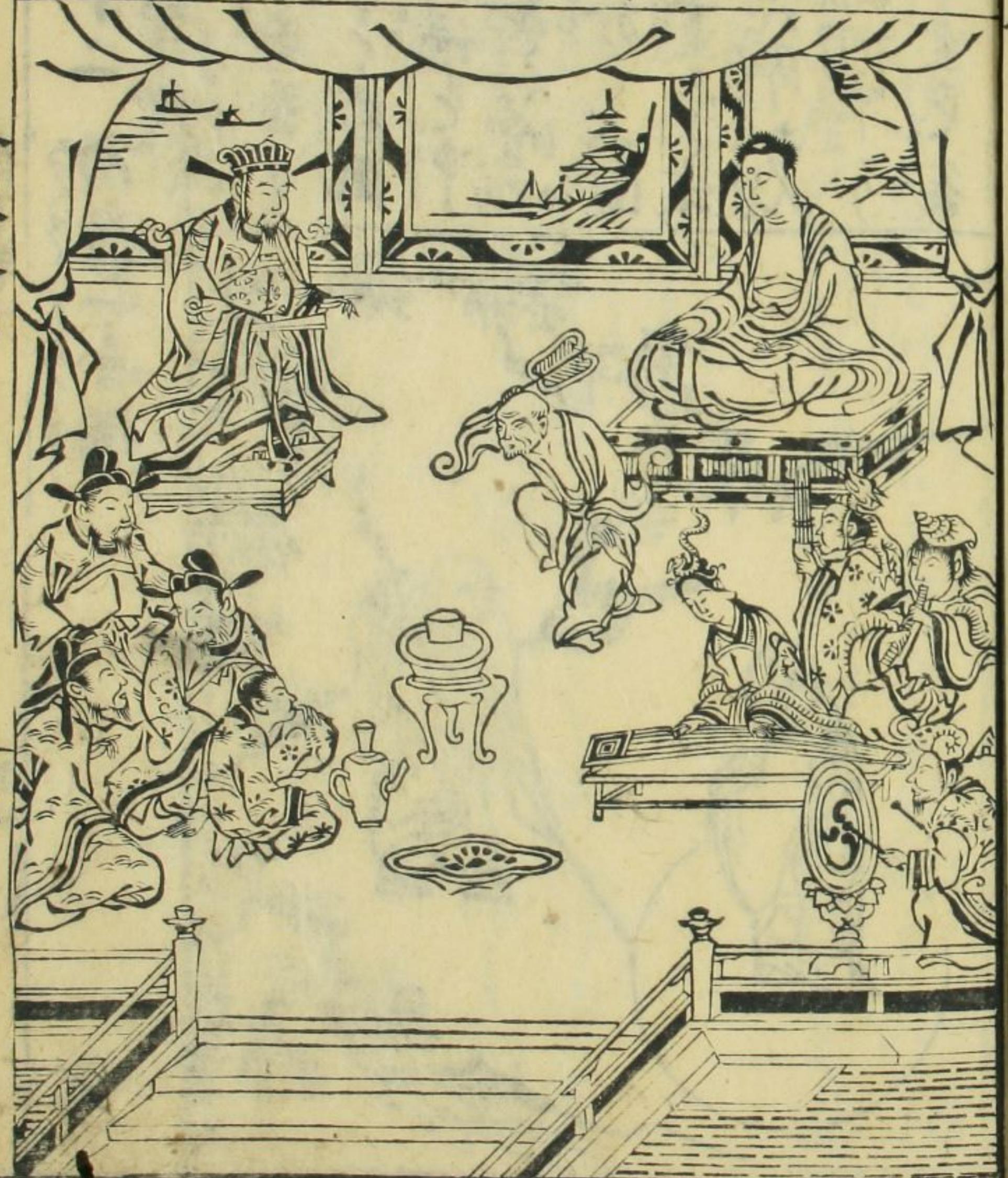


苦藥の運
獨妙因
苦信ノ次
ある翁の云
如醉の大翁
杖チ塔院
大蓋と戴
仰の云ニテ
大千せりが
總不裏许

あり。弟の云。王老師。吟。吟。坐と戴く役行

百八十一 边葉作舞

世の因。乾園達王樂と歎び。其の山河大地を尽盡
とす。か。素。起く舞と。王向か。素。置。乞り。往
来。行く。往處。已。ふらふら。何を。立。よ。絶。り。至
佛の。ゆき。寫。よ。絶。り。し。ほ。と。修。く。と。あ。れ。往。
琴。と。持。く。と。三。編。か。素。亦。三。及。舞。と。作。王の。因。か
琴。と。持。く。と。三。編。か。素。亦。三。及。舞。と。作。王の。因。か
と。舞。と。う。だ。王の。因。世。の。行。を。姿。と。い。る。佛の。
ゆき。海。夜。と。火。船。と。在。ま。ば。山。河。地。也。あ。ふ。そ。く
坎。引。か。と。う。す。豈。元。あ。う。ど。や。王の。因。乞。佛の。ゆき。



信。受。五。乃。五。信。受。五。乃。五。信。受。五。乃。五。信。受。

百半二 南島也一秀相

有寫於後。圓
圓徃く忠國
圓家麻呂と
作れ得と。やう
上よ於く。一圓
相と畫をと云。
道の間えん。
家。圓相中
移く坐毛。谷



伎女人相とあひ。仰の云を廣あくと則さへ。家
法乞甚度の心行を。仰内相喚ぐ圓従もく國
仰とれどい

百半三 嶺山守月祐

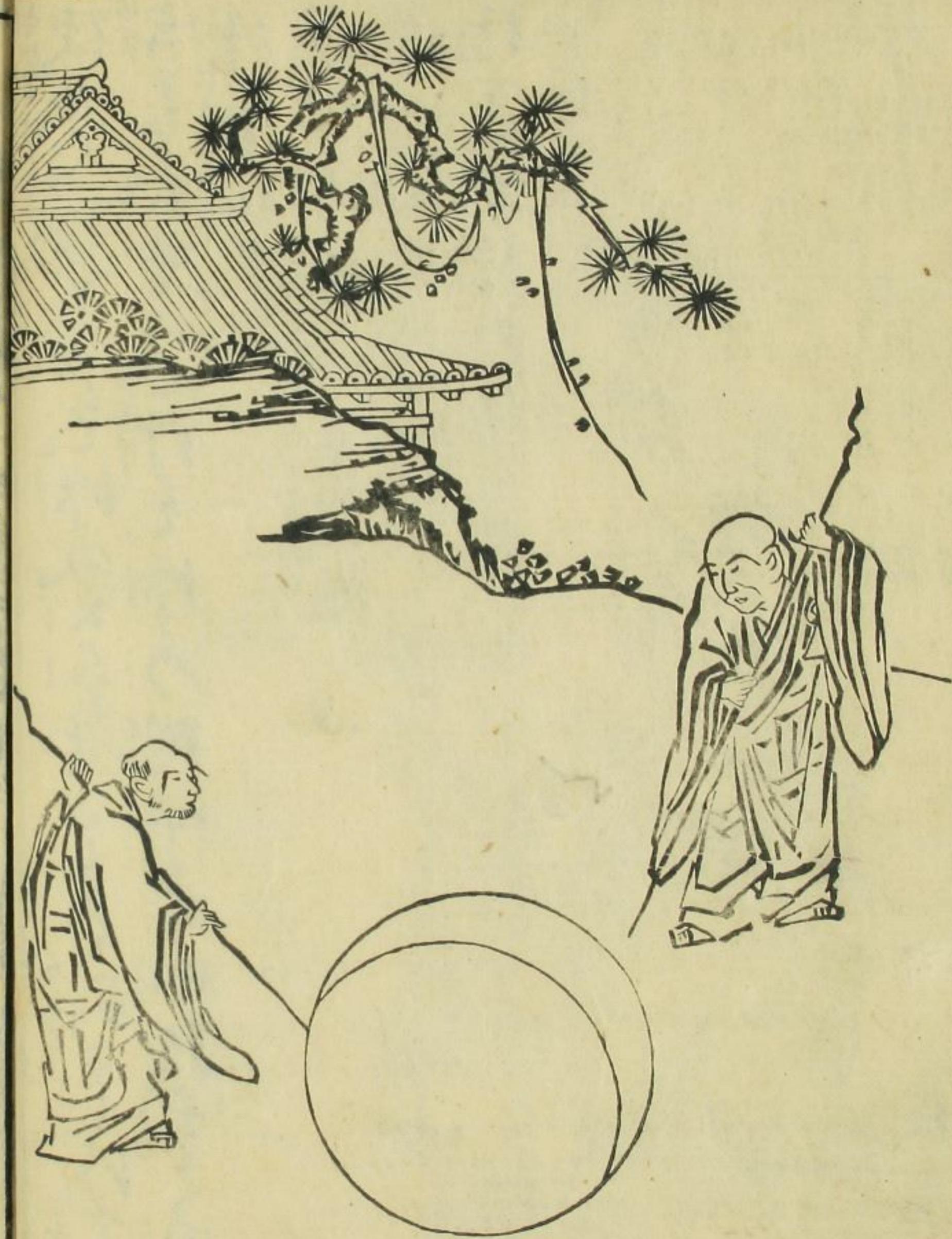
仰山寂徳作。一日梵僧仰あくあれ。仰地より
移く。半月の相と畫。作をあちく。而くあむ
とす

脚と以て拂却と

作あくと展

傍拂袖

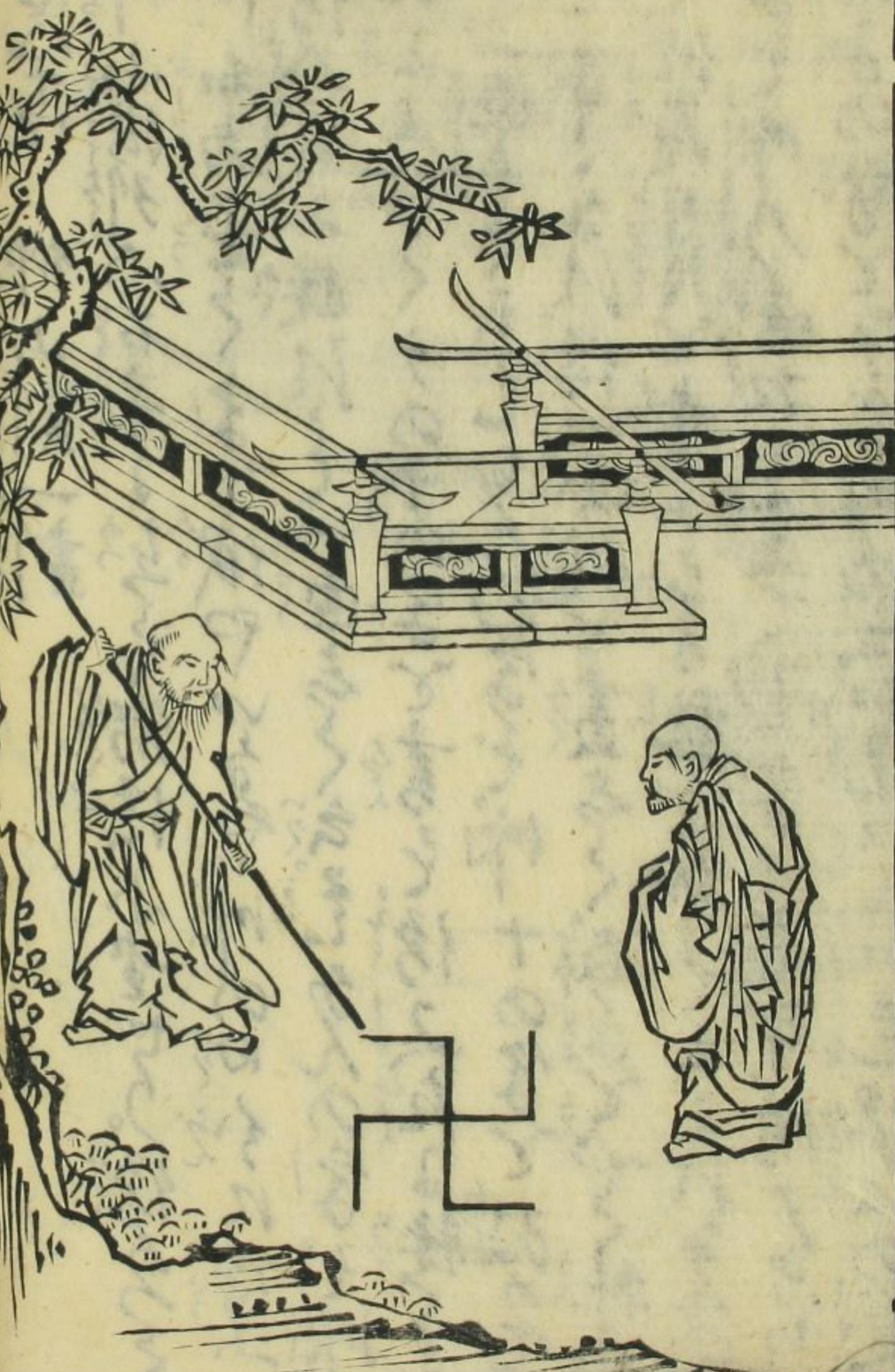
俊生



仰山劃一劃

石亭に仰山劃一劃
仰山畫作の石亭よちく。粥後小坐せり。傍あり
同和尚をくまと咸やつるや。仰の曰ひに咸ふ
傍の右ふ旋れと一画あくえきあんの字を仰
地とよびくケの十の字を書と傍又たよ旋く
と。一画あくえきあんの字を仰。十の字と改めそ
まへト。正字とあへ。傍一画相と畫ちく。あくひとよく托志
て。修羅日月とまふふらう勢とうて云。これらうの
字を仰乃喰ねと畫て。正字と圓却。傍するわら
御の勢とうと仰の云。如是く。此乞法師の復
そろあり。め亦かを君亦妙乞云。自復也セ

其傍礼拜立々をよ騰あらうく去さう



百平五 貨福一秀相

資福の寶經
作圖ふ源操
當事外郎役
一秀ねと畫壁
弟子する慶み外
あり乞役まきと
どね文ふみか
ねと盡まつよん
作中に於く
一秀と是陳云。



わ理色あ畜乃舶主と。印段方丈とゆく門と。室御も

瓦ノ十六 あ湯忠國印

忠玉印 因よ傍あつて事れ。お印一舌ねの中に日の字

と。畫きより。傍景と。か

瓦ハモ 麾吾坐仰覆の姿

仰山彦エ。よあつて。おふと。三所坐。義和小指と。うん

瓦ハ十八 黄壁虎聲

黄葉大雄山。首子と。様見し。瓦文印と。曰。大蟲
瓦ノや。と。付。黄葉大の。くら。と。虎の。ごく。虎の。が
と。せ。れ。そ。り。瓦文。斧と。ゆく。切。努。と。



百八十五 麻若持湯

麻若持徹福印
とおまき教の事
ゆかり。れとう。猿
さる。とめぐると三面
経と据と一ト吉
卓持て立
まひの向



百丈野狐

百丈禪師と臺子りて。一のき人あり。あれよほくはと雖。
一日あれうそく。唯を人のもむだ。仰ゆゆの毛けんぞ。を人の
曰果人よあべ。よそちのせ葉松の財。勇そけふは能。
因ア。ま人の大修行庵の人。多く因果よ爲やい。名
某對く云。因果うり爲じ。並くみ百姓があつて。野
狐うり。陸。本清。和也。一物。と代。そらくハ野狐力
と脱さん。と。仰ゆゆの向。四そ人の曰大修行庵の人
を因果よ爲やい。仰ゆゆの曰因果うり。財うり。を
人言トよむ。大悟あく。れとうて。向。果。よ。て。う
聖。狐。力。と。脱。と。仰。て。山。の。ね。よ。ち。ん。放。く。乞。そ。傍。

力はよ後く遙き。仰維母とまく。白褪さひ。衣よ告て
食後よ亡傷をもさんと。あえ寝後よとく。一衣ち
ゆ。煙築堂よ又高人。う。何の心をかくれど。やう。
食なよ仰立と。ひじて。ひね墨下に。ひ。枝と。い。一の
死。う。野狐と桃もと。のぼり。後く火葬と。仰喰ふ
む。上。前の因縁と。舉。薦築役の。古。人。活。一。物。活と
御射。う。み百生の。野狐。身。酒。と。ね。活。よ。人。も。ケ
乃。あ。す。ふ。う。う。べき。仰。の。因。を。ち。一。事。れ。酒。よ。向。く。道
ち。ち。築。を。あ。ち。く。仰。と。サ。と。一。掌。仰。と。仰。と。知。て
因。の。理。胡。鴻。鵠。赤。と。え。赤。鷹。級。あ。く。と。時。う。酒。山。舍
ひ。う。う。典。庭。と。や。う。司。馬。ひ。危。壁。鴟。の。佐。と。舉。て

の。高。巣。と。三。下。門。宿。と。生。え。と。作。ナ。作。と。興。見。



大麻生の日経は遙ケのたまよりと云ふと云ふ

百牛一 茅槃大儀後

茅槃後修了。かくは毎脚。まほす。泣きて育
同とあり。故ふたゆ後とくまうに。健東のの
脚とほふ。されば茅槃馬ば足もあれば。そ
とまごつてあつんとあり。おもてはる茅槃うあひぬ。
かうれ。まのま。紙はうぐが。かうとつて。茅槃の
同一も家下れど九族天う生せざれ。
かれあれありとちく。かく何の中へ辭つとくる。
まのまをみだす。天人て辭りかとお早
天うじう。辞ふとあり。ひひをせざんじうちを

やばうをせらんべ廢人う夏と泣あり。か
れうまひ古今茅槃一人あり。化人こそとまえ
て。かと跡じ育と氣と氣と氣と氣と
修修とせしむ端とぞ。宣ううれ。言候ふと
いり。茅槃へことふ考の人々と。かと
佛さしし考めとつて。路人考く願例さん。ば
ニケのうえり。いうふといり。九天よ雲起つて。十地
不風烈

石牛二 洞山禪本傳

えんせんのまつせん。洞山と禪本傳と。洞山生よ已
子。本傳と。故都と云ふ事と。傳云。衍國初。洞

山をあづち。あ稚と放下を



白字三 布袋

ゆゑの布袋おひらわちまご姓タケと洋ヨシみどり瓶ボトルアラク
脰コ腰ヒダう。通トシ倒トシ圓カイあよ付タタキし或人アリ向ムカシて
あうとうす。まく云アマドじと
事ハシれり。まく云アマドめも這アマドケの人はアリとまく云アマドじと
と解ハシじ。瓦アマド泡アマドふと。或ハ折ハシ折ハシく人アリとまく云アマド。
まハこき兜アマド率アマド肉アマド庖アマド。或ハ袋アマドももかく黒アマドを
揃アマドりそ。傍アマドよけふ。傍アマド接アマドさんと襷アマドと仰アマドすれつら
もと縫アマドく云アマド。或モ遠アマドテの人アリ仰アマドび。或ハ傍アマド行アマド
きと。或モからくもみくら。背アマドと襷アマドと一下アマド。傍アマドと
回アマドせばそれづら云アマド。我アリよ一文アマド後アマドと仰アマドてよ。あうとまく

布袋より傍より経る熟睡を。あひへむとあらのち
ゆく。小児辯あり。それと並んであひにねねとゆく
よりあれ。わうひハ粒珠カモリとひく。児とちとふたりあれ。
傍あり。いのうのう色相カタマチ。無事とゆく。つひ
布袋とあ下あく又もあて。傍云。只これ辭よ
更もあり。あうふ。内布袋と捨て肩と肩と去と
テ。又今捨ふうて。逃れ布袋ハ。これあると。又唐
の来。傍契此形腰接行。ほほひよ布袋と肩ふ
布袋和ると身とと。又宋朝カウチ。帝と身傍取
く。肚大あり。世ノ布袋と稱シメ。又元の蒙葉
の法代カウジが男密與つゆうべ。臍脇擁經。人或

乃く岐矣。これ今圓もくやみの布袋にゆく。うと。
ば肉より。あうつすのあ布袋れり。や。汝ふ姓
氏と洋ヨシヒトとあれど。れゆめぐし。もふけひそ
せふ。昔仙互せふ。天竺の南にあく。續ツヅク。ゆく。
袋布カバゆきつう。に方八千里。又年カウ。にて。そ北國
寢候。うつ。是がやう多々里と。かねば。は時その
身の事。位とかく。ゆき。ゆき。は。小。う。玉
と。東身玉と。と。ヤク。あうふま。と。東。小。西。ふ。小。傳
玉。小。東。と。月。皮。固。と。ひ。か。と。小。骨。ふ。と。ひ。西
と。全。完。ふ。と。ふ。ち。方。か。も。と。經。財。と。兵。と。折。そ。袋
布。ふ。と。せ。じ。袋。布。ふ。ハ。八。千。里。され。ざ。と。み。百。年。よ

一衣窓被をうわれて仰ひ三日四時ふせぬり。が
志后一日も寝食とやらせず。もううふ佛通眼と
ゆくをあり。彼とあらねど如し。ひまひいがのふに
ほんをあらゆがせのふうはゆかへる。ほんのと
隠行て。私後どうべ其时佛通力と現て。か
葉と与す。空身光輝ふうめうり経ひ。微めの
はと近ゆ。上御相うち。下乞ひふすらと
一ふくらぐき。利養出家を。佛頂語にて。善哉
云ち。善生と歎古く。かとまうて。尼去と
まふ。さて被袈布。ま八千枚の。うひ一時よ体。
大年。まとまう。又とのふにも。ほほとけづく。

弓山林小屋をぬ。まに苦行すうと二年半。あん
ばく農民まおあらう。れば耕耘の業。終く饥
ふらうとんとく。帝玉廟と爲き。粟と教。う
服とう。あれを糰て。老く死。が年。計
あくとやう。雪中の人民。う一よ減せり。えま
まぬ。同五とゆう。ま。若行熟せぬともぐく。金
穀代もう。まえ。ひくし。や。帝玉かの。諱。勤よ。發
き。まく人民の。嫌。金廟ひく。を。あ。ひ
の。ま。と。う。げ。ま。活。り。わ。う。佛。又天。海。う。微。め
の。活。と。近。活。ど。も。火。多。玉。が。お。の。經。と。修。じ

ふた裏滅よろびよ。懲るお会じ。尔时佛大音
あらうにく。さ即そをか即そととのゆへで。宿
ち地震動ある。火身玉をあ民を。され候とひとき
み体と坐くらしとれども。されめども。被
瘞ぬまうちし。年ハ魚子。物とすり。空を
吹く。与ア酒呑。没ちく。失よす。右はひ物を
一。まう。傷く。これと大す國と。そて被瘞布。あ
怪多。て。う。士農工商。皆。藏小ゆて。富饒。城
樂のあたと。う。しと。或。氣の。わ。り。しが。そ。れ。を
行。き。れ。經。ふ。ア。そ。う。し。と。つ。じ。氣。り。き。そ。く。走
ハ。ち。ば。い。い。れ。え。か。う。布。富。國。の。ゆ。く。と。ぞ



夏半に 阿國世王
阿國世王ハアラタウト。後宮下りて。醉象と
共に。世主おもて出で。酒へば。おれど。うり御子
を。く。あ。う。かれど。酒。よ。法。努力。う。め。そ。れ。な。
象。う。ら。ち。ら。い。お。う。ア。國。世。王。放。醉。象。世。尊。現
指頭狮子と云り



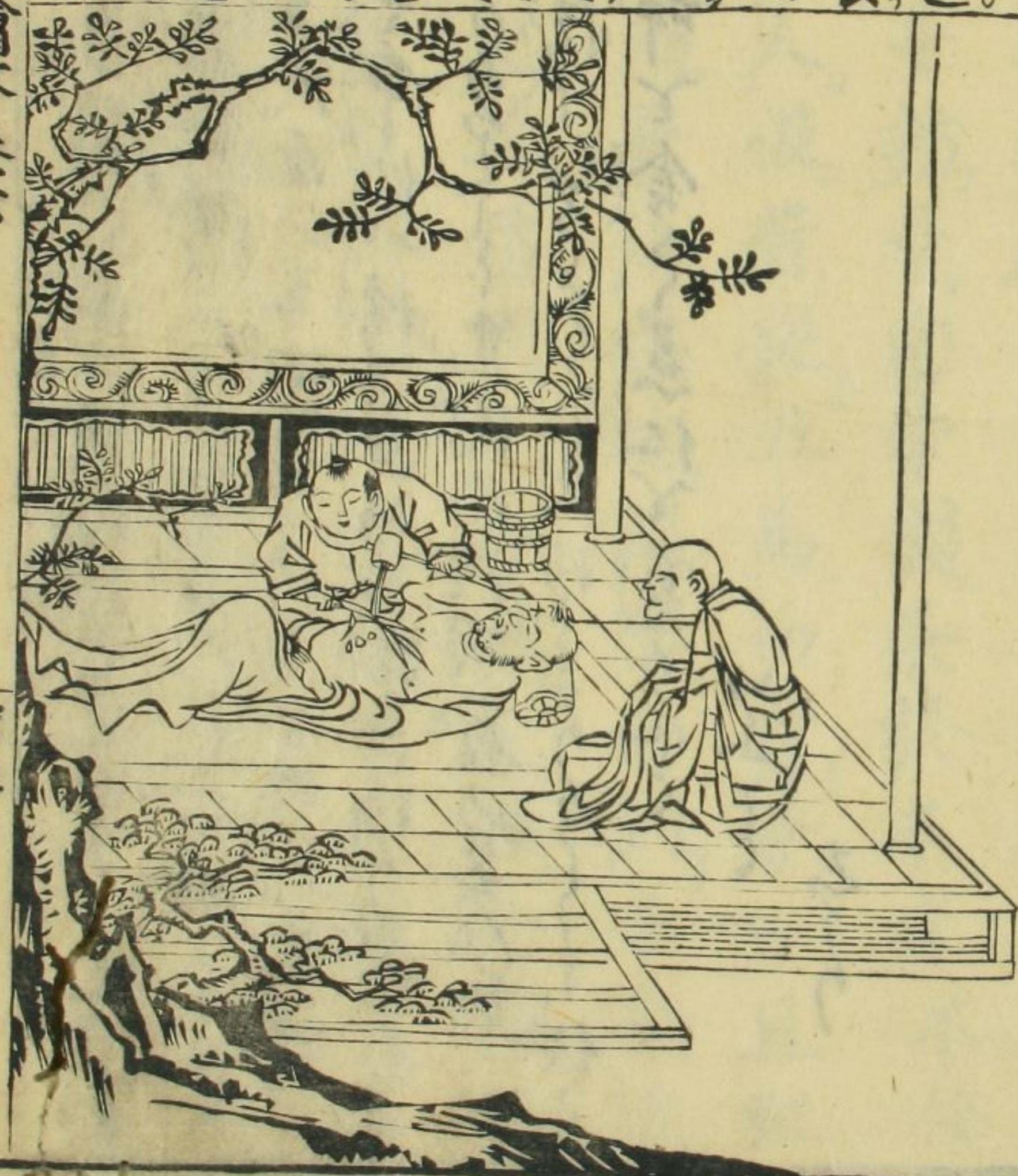
百半五 惟達國作

昔恨を和尚ふ譽傍つてふ百人あつともに一人第
瘡と生と譽傍毛とうらうくゆりひ。わるの對面毛と
ちとひわひう。むるはたもく。今りん人と看明日
父ア肩らむあひありととあまく。延年童のやれ
玉とす玉とタ乾の板と毛と板下にかくと
与洋と百日目どりう。日と延年會と古實
ゆきにわちつけられひとせと解。よと又和る難
ふりとほんとほとせと通暦く。一宿ふるを
山の頭うねこ平野。し。弱絆てやとひゆくゆくゆくゆく
まは恵毛多角あく。國作と号したるをなちとす

國作膳とよ人面瘡とて瘡ゆり。ば瘡力かく。
人の聲と。口をひり口をひり。渴れどもとよひ。
飢きばまれつら飯ととぶ。天地よひ。満^スの詠
きさりぐ。譽傍もみれ。他にみきつ。やうの喝食もむか
譽傍もみれ。りよう國作利根の聲もむかひ。じ
ば。めり乃高傍のとばとむひ。よくねよ分
ら。游山の歌と遠毛とばげんりと。二本れねと
振極みせば。序とよて一毛ひど。立と。併せむひ
うさぐに。魚金敵機國服男ふかやあり。ひが
處と。それどい。譽傍の内の高傍門ゆふ出く。
國作とゆれ。傍れ云ひるくとあられ。國作の產と僊

もよし。今宿。始てありしうだ。因作序。其後人
ね次ノ月兎考。あ跡のとく。温泉アリ。柳
のねとちよとく。癒と洗其財人。西癒がとゆく。
同侍我とあらふとあられ。宿固あり。御宿れど。
人面魔向言我ハコレ。兆素と御と御と御と御と
妖あり。兆妖兆素とねじ。の難と執さんと欲と海
難とうすとひそづべ。あつて今じまえもと
難ふりきうり。とき涼やかとひ癒とあら
難としきづんとん。もううう今め病傷とひづく

育し大意。
大悲と感。し
今則ち云
うとうれ
て。疾ハ急
禮。おへ
内よくと
傍見をと
ゆ。昨
大悲と感。し
色消矣。



お作乞うりつゆく懺は讀誦すゆり
首了楚莊絶縁不く。楚王の仁心と感じ。先
まう。物を人面の事ゆとらう。お作の意想と
能ひ。あそびにハ悟り。さけり。株子さけり。卑あき
あり。少く。あらあら。と。免園内。波胡蘆の名ひのものに
あく。月と。夜と。しらべ。へよへひ。ごうごう。かく
歌く。文辭と。多く。慈仁と見りんと

つまと
ちうり

繪本寶鑑後序

授安由子訪予南華園。茶誅半日。不佞
曾識其人。彼昔從五馬而脅蒼。一旦致
謝而漂泊。蒼海速達風塵。而到于今雖。
葆辟。キ又莫雷同。之私越交膝。於繁標
寓形。於青壁。不佞也。欣然。于其間。由子
解裝出。一書披閱。之元所見也。此書也
綴者。在目錄。而文詞支離無名。可名矣。

今而由子芟補於其闕文重亨乃遂一
窮其原且其辭女字而雖了角童蒙無
囁嚅之累義理亦自歷々予始讀一項
無味再讀二項覓薄味遂讀三項至于
滋味直得其蔑之佳境也厥盡也者出
于零舟乏嫡流筆法誠活然非世乏筆
耕鴉點乏辟焉蓋以口弄手翫之一法
示師聖丈賢之一階繪本寶鑑勤爲之
名實在茲豈與謳歌流言乏冊齊架耶
惟夫令人得不俟一步而窺青燈樓乏
功葱々在裏許於乎子之用意也於世
亦奚甚幸矣哉戊辰正月上浣隱市
植村氏丁敬子謹跋肯貞享五年也



鰐

東武

平埜屋
清三郎

書林

中華

半丸衛門

小佐治

龜

攝陽

貫器堂

重之梓行

